

molten
For the real game



藤本 満美子 Mamiko Fujimoto

株式会社モルテン 総務・秘書・広報室
(2005年3月 総合科学部卒業)

—モルテンに就職したきっかけは?

昔から海外に興味を持っていたので、「就職するなら世界とつながりのある企業に」という気持ちはありました。その思いを決定づけたのが留学経験。日本製品があふれかえっていて「日本の技術力ってすごい」とあらためて感じましたし、そういう力のある企業で働きたいという思いを強くしました。車やパソコンなどいろいろな製品がありますが、使っている人たちを見てうれしになれるモノは何って考えたら、みんなが楽しめるスポーツ用品っていいと思うようになり、競技用ボールを開発しているモルテンを選びました。

決め手となったのは、採用面接の際、人事の方に「社長秘書って選択肢があるけど、どう?」と聞かれ、大学の先生に相談したら「モルテンの社長は一流のビジネスマン。秘書として働けるのは幸せだよ」と言われたことですね。



—主な仕事内容は?

メインは、社長あての電話や来客の対応ですね。ほかには、ファクスやEメールをチェックして要点をまとめ、社長に報告し、それに対する返答・指示を先方にご連絡して…とその繰り返しです。企業のトップの方は、お忙しいばかり。重要事項のみを簡潔にお伝えるように気を付けています。これがなかなか大変。でも、自分が用意した資料に対して、

秘書になって時間の大切さを痛感。
有効に無駄なく使うよう心掛けています。

「気が利くな〜」と一声かけてくださったり、「ありがとう」とメモが残されていたりすると、うれしいですね。私は元々、大ざっぱ。秘書になって3年目、ちょっとは気が利くようになったかなと思っています(笑)。もう一つ、常に心掛けていることは、自分が社長になったつもりで行動すること。何をすればいいかが、必然的に分かってきますから。



—学生時代にやっておいてよかったこと、逆にやっておけばよかったと思うことは?

留学やダンスサークルでの経験が役に立っています。人前であまり動じなくなり、大勢の方々がお集まりになるパーティーの司会などもスムーズにこなせるようになりました。しておけばよかったと思うのは、「時間を無駄なく有効に使う」訓練。学生時代はあまり時間を意識せずに過ごしましたが、仕事は決められた時間内で必ず終わらせなくてはならない。私にとって、仕事とは結果です。今日やるべきことが、時間内にできるのか、できないのか。厳しいけれどこれを常識的な仕事のやり方と考え、日々業務に取り組んでいます。

社長は、超過密なスケジュールの中、オンとオフを明確に分けていらっしゃる。勉強になるし、人生のお手本って感じですね。

社会の第一線で活躍している先輩たちの職場を訪ねて、突撃インタビュー。
仕事のことから学生時代に身に付けておくべきことはまたプライベートの時間で、
私たち学生の素朴な疑問・質問にお答えいただきました。

羅針盤

OB&OG紹介



—仕事内容とやりがいについて聞かせてください!

携帯電話、テレビ、パソコンなど多くのデジタル機器に使われるDRAM。そのキャパシタに使われている容量絶縁膜の開発を担当しています。キャパシタとはデータをためる



バケツのようなもの。簡単に言えば、より多くのデータをためることができる膜の開発ですね。最近では、DRAMの高集積化・微細化が進んで、容量を確保するのが難しくなっているため、模索しながらやっています。

広島開発センターは、研究開発と量産工場の2つの機能を兼ね備えているため、開発した製品をすぐに量産へ展開

できるという利点があります。ただ、開発途中でトラブルがあったりすると、ダイレクトに量産に影響を与えてしまう可能性が高いんです。それを防ぐためには、開発プロセスは当然ですが、量産のことも理解した上で仕事に取り組みなければなりません。何事も分からないままやるのが一番良くないと思うから、疑問があるときにすぐに勉強するように心掛けています。

責任は重大ですが、私たちが努力して開発したものが、世の中に出回る製品に組み込まれて使われているって考えたとき、一番達成感を感じます。

—学生時代はどう過ごされましたか?

学生のころから半導体の絶縁膜の研究をしていたんです。

大学にあるクリーンルームで、自分で装置をオペレートしながら実験をしていたので、操作や評価の手順などを身に付けることができ、入社後にとっても助かりました。

私の場合は学生時代の学習が、会社に入っても必要なスキルでした。半導体の授業などは、本当に大切なものだったと思います。今になって大学の授業の内容が必要になってくるので、もっともっとまじめに勉強すれば良かったと思いますね。

—仕事をする上でのポリシーを!

広大時代の恩師がよく言われていたのが、「世界一のエンジニアを目指して取り組みなさい」この言葉は、すごく印象に残っています。研究開発をやるからには、常に高い目標を持つという姿勢を大切に、仕事でもプライベートでも探究心を忘れないようにしたい。別にすべての分野で一番にならなくてもいいんです。今の仕事で言えば、DRAMのすべてじゃなくて、容量絶縁膜をつけることは世界一、そういう一番でいい。



会社が掲げているスローガンも「Be the World's No.1」。現状に満足することなく、追求し続けて世界一を目指したい。そのために、常に努力をしたいと思っています。



藤原 直憲 Naonori Fujiwara

エルピーダメモリ株式会社 広島開発センター プロセス開発担当
(2002年3月 先端物質科学研究科博士課程前期修了)

常に高い目標を持っていたい。
まず一つの分野から世界一に。

取材を終えて



とてもやさしい雰囲気の方で話しやすく、インタビューにもきれいな言葉で簡潔に答えてくださいました。さすが秘書!という感じ。取材を通して、本当に社長を尊敬されているのが分かりました。「時間を大切に」というメッセージは、学生として身に染みる部分も多かったですね。今後は、ゆとりのある大学生だからこそ、時間を有効に使っていきたいと思います。

取材・記事 / 歯学部1年 大岡 誠真



印象に残ったのは、「立ち止まらず、常に高い目標を目指して走り続けていたい」という言葉。明るく仕事や学生時代のことを語ってくれた藤原さんは、本当に充実した生活を送っているんだろうなと感じました。藤原さんは2000年3月に工学部を卒業。同じ学部の先輩ということもあり、私にとって将来を考える良い機会になりました。

取材・記事 / 工学部2年 山我 典子